

夫の出征

中区支部 大八木 淑子（妻）

戦没者 大八木 貞男

戦没地 北京・第一五一兵站病院

「北支の貴方はどうなるの？」と終戦を知ったその瞬間から、小さな息子を抱きしめ心の中で叫んだ。夫は二十年三月十三日に召集された。当時、家は横浜にあったが、十九年七月から静岡県の子会社の支社に勤務していた。そこへ応召の報せが届いて夫と慌ただしく横浜へ発った。駅について驚いた。着物は破れ、顔や手足を大やけどした人々が右往左往、三月十日の東京大空襲だった。静岡にもB29がよく飛んできたが、現実の光景には驚きと悲しさでいっぱいになり上反町の家へ着いた。十三日に甲府に入隊だったので短い三日間だった。

夫は大学時代から読書家であり、よく考える人であり、自由人であった。しかしながら、私は夫のように深く物事を考え把握することができなかった。夫が「日本は負けるかもしれない」とためらいがちに言った時にさえ、私は何も判らぬまま「非国民」となじったりした。しかしながら、夫はもちろん自分は日本の為に戦う覚悟があると静かに答えた。私の父は日本郵船の御用船の船長として、敵前上陸を試みつつ船団を組んで弾丸の下を航海していた。

その日、横浜駅に息子を背負つて、出征する夫を見送つた。夫は本当に子煩悩であつた。もうすぐ二才になる息子の可愛い頬をちよんちよんとつついて「大きくなれよ。」と笑いかけていた。

当時、その子は一才九ヶ月、もう一人は胎内に三ヶ月、私は別れの手を振つた。果てしない不安を感じ空漠な思いであつた。父が遠い米国航路でも、欧州航路でも、乗船する父と別れても、数ヵ月後には帰つてきたことと少しだけ重ね合わせてしまった自分は、その時はそれからのことを深く認識できずに申し訳ない思いでいっぱいである。甲府まではお舅様が付き添つて下さつた。それから五月に空襲があり、横浜の我が家も実家も全焼した。七月に簡単な葉書が来て夫は北支にすることがわかつたがそれきりだつた。

とうとう戦争は終わつた。静岡の山の中へも順次復員される方がいて、隣家はビルマから復員されたが夫はなかなか帰還しなかつた。その内、十月には元氣に次男が生まれ、その子を背負い、長男の手を引き駅に通つた。

駅頭に帰還列車が着く度に「私の主人は北支なのですが」と尋ね回つた。「私達は中支で、北支は終わつたはずだ。」と言われても私は帰つてくると信じきつていた。二十一年九月にお舅様が来られた。「二十年十月三日到北京兵站病院で亡くなつた。」と報せて下さつた。全く青天のへきれきであり私は泣くこともできなかった。

横浜の家は焼失していたので、母の富山の実家に二人の子供と私は身を寄せた。弟達も、私の子供達を本当に可愛がつてくれて今でも有難いと思つてゐる。二十四年末に横浜へ帰り、今日まで、大八木家の長男であつた夫は亡くなつてしまつたが、長男の嫁として二人の息子の母として

働き、両方の両親を看とり心をこめて生きてきた。

戦後六十五年目、幼い時父と別れた長男、父の顔を知らない次男、二人の息子がすすくと立派に成長してくれたことを、神様と夫、家族、周りの方々に私は心から深く感謝している。この日々は感謝の日々である。

駅頭がくらくなりゆくかなしさよ 帰還兵らの言葉聞きつつ

夫果てし地平を染むる夕つ陽を 子らと眺めしただ眺めいし

極まりて茜うつくし杳き日の 夫の遺骨還り来し日も